

# 柏木さん(殿町出身)が歌人論

津市で講演会  
会津八一と吉野秀雄を対比

松阪市殿町出身のフランス文学者・柏木隆雄さん(78)は兵庫県西宮市在住。9日午後2時から、津市の県生涯学習センターで開かれた第22回文芸講演会(三重日仏協会など主催)で「会津八一と吉野秀雄―奈良の古寺・古仏をどう詠んだか」と題して話した。協会員や一般市民ら約30人が聴講した。

柏木さんは大阪大学名誉教授で、大手前大学名誉教授(前学長)。現在は同大学大学院比較文化研究科で客員教授を務める。日本文学にも関心が深く、今回は会津八一(1



参加者の後で、講演の質問に答える柏木さん。津市生涯学習センター。

881〜1956年)と吉野秀雄(02〜67年)という師弟の歌人を、奈良の古寺・古仏を詠んだ歌を中心に対比した。

会津は歌人で美術史家、書家。英語教師時代の09(明治42)年、28歳で初めて奈良を訪れて短歌を詠み、24(大正13)年に第1歌集「南京新唱」を出版したが全く売れな

かった。

吉野は歌人で書家。会津より21歳若い。25(同14)年、「南京新唱」を

読んで感激し、会津に手紙で質問、会津も返事をだし、やがて師弟となる。奈良は明治になって廃仏毀釈(きしゃく)で荒廃。そんな時代に会津は初めて奈良を訪れ、美を

再発見する。「南京新唱」

は哲学者・和辻哲郎(1889〜1960年)が奈良の古寺・古仏の美を説いた「古寺巡礼」に5

年遅れこそしたものの、柏木さんは法隆寺の百済観音を歌った「ほほ多みてうつつごころに／ありたす／くだらぼとけに／しくものぞなき」を

引き、「百済観音の魅力を一言で言い尽くしている」と称賛する。

会津は薬師寺の塔を「すい多んの／あまつおとめが／ころもでの／ひまにもすめる／あきのそらかな」と詠んだ。一方、吉野は「軒の三重(みえ)／裳階(もこし)の三重の／六重の段(きだ)／見つつし飽かね／薬師寺の塔」。柏木さんは会津の歌に「軽やかに見えて透明な古典的な世界」を見、吉野の歌を「新しい近代的な見方がある、自分を主張する歌」と指摘する。

また会津の養女をみと

る静謐(せいひつ)な歌と、吉野の49歳で死へと赴く妻との壮絶な愛の歌にも触れ、「2人の歌人のそれぞれが最愛の人の死を送る短歌の、何と異なっていて、しかもそれぞれ共通して、何と深い愛情から詠まれている」とか。2人の相異なる歌の姿の中に、2人が追求してきた普遍の芸術の神髄というものがおのずから見えてくるように思う」と締めくくった。